

キャリア教育に関する研究

—学校と社会をつなぐ支援プログラムの開発—

高知県立幡多農業高等学校 教 諭 山下 和利

高知県では高校生の就職内定率が全国平均より低く、早期離職者の割合も高く推移し、卒業時の進路未決定者が多いなどの課題を抱えている。社会からはコミュニケーション能力の育成が強く求められており、学校から社会への円滑な移行のカギになると考えられる。進路学習では、他者とかかわることで「自己理解」を深め、進路に対する意識を高めるとともに、コミュニケーション能力を伸長することが必要であると考えられる。

本研究では、グループワークを用いた進路学習が、「自己理解」を深めて「進路意識」を変容させること、また他者とかかわる活動が、コミュニケーション能力の要素である「発信力」と「傾聴力」を向上させることについて検証する。

キーワード：グループワーク、自己理解、進路意識、発信力、傾聴力、学校と社会

1 はじめに

(1) 高知県の現状

文部科学省では高校生の就職内定状況を示しているが、平成19年度の全国平均が93.9%であるのに対し、高知県は88.3%と低く、近年は全国平均を下回る状況が続いている。また、高知労働局が示す高卒就職者の3年以内の離職率の推移を見ると、全国平均が50%を少し下回って推移しているのに対し、高知県では平成10年度以降、常に50%を超えており、全国平均よりも2～5%程度高い値で推移している。それだけではなく、卒業時まで自分の進路を決めることができなかつた生徒も多く、平成19年度も800名以上の進路未決定者（うち進学未決定者319名、就職未決定者196名）がいる。

(2) 「自己理解」を深める支援

自分の生き方を決めることができなかつたり、社会のなかでうまく生きることができなかつたりする原因の一つに、生徒一人一人が主体的に自分の在り方や生き方について考え、決めていくような指導・支援が十分ではないのではないかと考えられる。吉田（1999）は、「進路指導における生き方・在り方探索の基本の七分野（自己理解、進路計画、学校選択・学校情報、職業選択・産業職業情報、啓発的経験、就職・進学、追指導・職場適応）のうち、重要なベースとなるものが『自己理解』である」と述べている。また吉田は、「高校生が『自己理解』を自分自身で深めることは難しく億劫で、友達からの言葉がけが意味をもつ」とも述べている。法政大学の宮城も、平成19年度キャリアカウンセリングセミナーにおいて、「他者からのフィードバック等、他者とのかかわり合いのなかで『自己理解』を深めていくことが大切である」と述べている。

(3) 社会で求められる力

社会の形成者として生きていくために必要となる力は、多くの企業から「求める人材像」として示されている。平成19年度の東京経営者協会の新規高校卒業予定者の採用に関するアンケート調査では、主体性やコミュニケーション能力を求める割合が高く、社会のなかで生きていくために、より必要とされていることが分かる。しかし、平成15年度の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」の高卒採用者に対する評価によると、実際には若者にこれらの力が弱いと感じている企業の割合が高く、求める人材像との間にギャップが見られる。平成20年度求人事業所説明会に参加していた企業に対する聞き取り調査でも、コミュニケーション能力が不足していると回答した割合が高く、不満に感じているという結果であった。また、高知県経営者協会の「高校

生採用に関する企業意識調査報告書（2009）」でも、高校新卒者に対して、コミュニケーション能力が乏しいと44%の企業が回答している。更に、平成15年度の厚生労働省の若年者キャリア支援研究会報告書では、コミュニケーション能力の不足による人間関係の悪化が、早期離職の大きな原因の一つとして報告されている。

(4) 専門高校における進路学習の現状

高知県の専門高校における進路学習は、おもに進路ロングホームルームで取り組まれている。しかし、年間に設定された進路ロングホームルームの時間数が1～4時間程度という現状であり、進路ガイダンスや進路講演、願書・履歴書の書き方指導や個人面談等、取り組む内容は多岐にわたっているものの、他者とかかわる活動はあまり取り組まれていないことが、平成20年度公立高等学校進路指導主事会情報交換資料から分かった。

また、佐野（2006）は「専門教科での学習が知識や技術の習得にとどまっているので、社会のなかで培った能力を生かすことができる生徒を育てる指導・支援が必要である」と指摘している。これは、進路が多様化している農業以外の専門高校にも当てはまると考えられる。

(5) グループワークの活用とコミュニケーション能力の伸長

進路学習として位置付けられた取組は、ガイダンスや講演等が大半を占めているが、これらは生徒が受け身になりがちである。法政大学の宮城は、平成20年度キャリアカウンセリングセミナーにおいて、「コミュニケーションと対人関係の育成を基本において、グループワークに取り組みせることが必要である」と述べており、進路学習のなかでグループワークを活用し、進路意識の高揚と同時に、コミュニケーション能力の伸長を図っていくことが重要であると考えられる。

文部科学省は、「キャリア教育推進の手引—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—（2006）」のなかの「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」で、コミュニケーション能力を「多様な集団・組織のなかで、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力」とし、「自己の思いや意見を適切に伝え、他者の意志等を的確に理解する」等の具体的な能力・態度として示している。また、厚生労働省は「YES—プログラム（2005）」の「就職基礎能力」、経済産業省は「社会人基礎力に関する研究会—中間取りまとめ—（2006）」の「社会人基礎力」のなかで、コミュニケーションにかかわる諸能力を示している。コミュニケーションのとらえ方には幅広さがあるものの、話すことと聴くことは、コミュニケーションにおいて基礎的で重要なことであると考えられる。

2 研究目的

上記のことから、専門教科での学びを、卒業後の生き方や進路と結び付けるためにも、進路学習のなかで「自己理解」を深めるグループワークを積極的に行い、生き方や進路に対する意識を高める必要があると考えられる。そのために他者とかかわる活動を積極的に活用し、学校から社会への円滑な移行のカギになるであろう、コミュニケーション能力の育成について、指導・支援の一層の充実を図っていく必要があると考えられる。コミュニケーション能力の要素として、話すことを、自分の考えや意見を分かりやすく話し伝える「発信力」とし、聴くことを、相手の考えや意見を丁寧に聴く「傾聴力」とし、これらの力を向上させることでコミュニケーション能力の伸長を図ることができると考える。

そこで、進路学習にグループワークを用いて、他者とかかわらせることで「自己理解」を深め、「進路意識」の高揚を図るとともに、「傾聴力」と「発信力」の向上をねらいとした活動に臨ませることで、コミュニケーション能力の伸長を図ることができるのではないかと研究仮説を立て、検証することとした。

3 研究内容

(1) 基礎研究

東京経営者協会の平成20年3月新規高校卒業予定者の採用に関するアンケート調査から、高卒者の採用においてコミュニケーション能力や協調性が重視され、社会から強く求められていることが分かった。

また、平成20年度求人事業所説明会に参加していた、高知県内外の事業所25社の採用担当者の方々に、

「高卒採用者に高校で身に付けておいて欲しかった事柄」について聞き取り調査したところ、25社中21社がコミュニケーション能力と回答し、最も高い割合となった。

このように、社会で生きていくうえでは、コミュニケーション能力が大変重要視されていることが分かった。

(2) 実態調査（進路指導・進路学習におけるグループワークの導入頻度に関する実態調査）

進路学習のなかで、グループワークがどの程度取り入れられているか知るために、高知県内の公立高等学校（全日制、定時制・多部制・単位制の昼間部を対象、定時制・多部制・単位制の夜間部、通信制は除く）38校の進路担当教員を対象として実態調査を行った。「積極的に取り入れている」と回答した学校が7.9%、「ある程度取り入れている」は26.3%、「あまり取り入れていない」は36.8%、「ほとんど取り入れていない」は28.9%となった。また、そのうち専門高校10校については、「積極的に取り入れている」と回答した学校はなく、「ある程度取り入れている」は10%、「あまり取り入れていない」は40%、「ほとんど取り入れていない」は50%であった。

このように、高知県内の専門高校では、進路学習のなかでグループワークがあまり取り入れられていないという実態が明らかとなった。

(3) 実践研究

ア グループワークを用いた進路学習支援プログラムの作成

今回の研究では、高知県内の公立高校のなかで、就職希望者の割合が高い専門高校に対して、グループワークを用いた進路学習に、「発信力」と「傾聴力」の向上をねらいとしたプログラムを作成し、提案することとした。

グループワーク活動の流れでは、自分の考えや意見を他者に話す場面、他者の話を傾聴スキルを意識して聴く場面を設定し、「発信力」と「傾聴力」を向上させることをねらいとする活動を

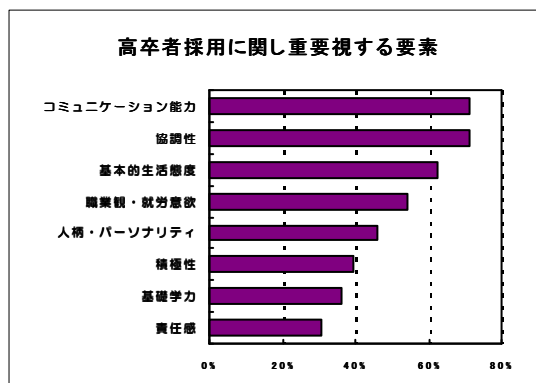


図1 高卒者採用に関し重要視する要素

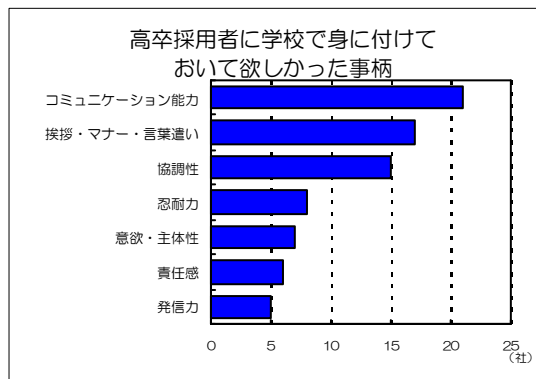


図2 発信力、傾聴力、進路意識の変容

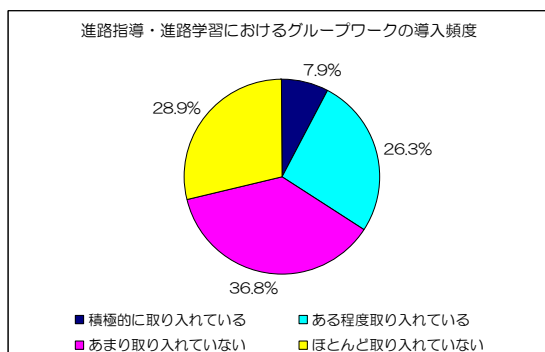


図3 進路学習におけるグループワークの導入頻度

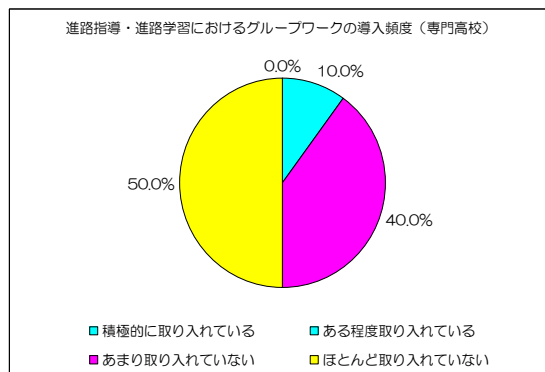


図4 専門高校の進路学習におけるグループワークの導入頻度

組み込み、全員が話すこと、聴くことに取り組みさせるようにした。最初の活動として、話し方や聴き方について学び、意識付けさせることをねらいとした内容を計画した。その後のグループワークを用いた進路学習は、「発信力」と「傾聴力」の向上及び「進路意識」の高揚をねらいとして内容を計画した。

イ 検証授業の計画と実施

(ア) 検証授業の目的

グループワークを用いた進路学習を通して、「発信力」と「傾聴力」の向上を図り、「自己理解」を深めることによって起こるであろう「進路意識」の変容について調査し、有効性について検証をする。

(イ) 対象生徒と授業内容

高知県内の専門高校であるA高校の2年生33名と1年生40名を対象として、2年生は2時間、1年生は1時間グループワークを用いた進路学習を実施した。2年生は「話し方と聴き方を意識付ける活動」と「自己の職業適性を知る学習」、1年生は「自分の生き方を考える学習」の内容を実施した。

(ウ) 検証方法

アンケート調査は、ソーシャルスキルやアサーションスキルをもとに「傾聴力」に関する8つの設問、カウンセリングスキルをもとに「発信力」に関する5つの設問、進路選択に対する自己効力感尺度をもとに「進路意識」に関する15の項目を設定した。「発信力」と「傾聴力」は、設問に対して当てはまるかどうか、「進路意識」は項目に対して自信があるかどうかを5段階の数字で記入してもらい、それぞれの平均得点の推移から変容について検証した。

授業評価票では、生徒及び参観者を対象に、授業の内容やねらいに対する9つの質問項目を設定し、4段階の評価と授業に対するコメントを記入してもらい、結果について考察した。

振り返りシートでは、自己の取組に対する4段階の評価と、活動を通しての気付きや感想を記入してもらい、結果について考察した。

ウ 検証授業の結果と考察

(ア) アンケート調査

検証授業前後のアンケート結果から、全体では「発信力」が0.13ポイント、「傾聴力」が0.16ポイント平均得点が上昇し、t検定（5%水準）で有意差が見られた（図5）。「進路意識」は0.25ポイント平均得点が上昇し、t検定（1%水準）で有意差が見られた（図5）。希望進路別で見ると、大学・短大希望者の「進路意識」、就職希望者の「進路意識」、未定者の「発信力」と「進路意識」の平均得点が有意に上昇した（表1）。実施クラス別で見ると、2年生は「発信力」が0.16ポイント、「傾聴力」は0.20ポイント平均得点が上昇したものの、有意差は見られなかった（表2）。しかし、「進路意識」は0.42ポイント平均得点が上昇し、t検定（0.1%水準）で有意差が見られた（表2）。1年生は「発信力」が0.11ポイント、「傾聴力」は0.14ポイント平均得点が上昇したものの、有意差は見られなかった（表2）。しかし、「進路意識」は0.13ポイント平均得点が上昇し、t検定（1%水準）で2年生と同様に有意差が見られた（表2）。

アンケート調査の結果から、自分の考えや意見を話すこと、他者の考えや意見を聴くことで、

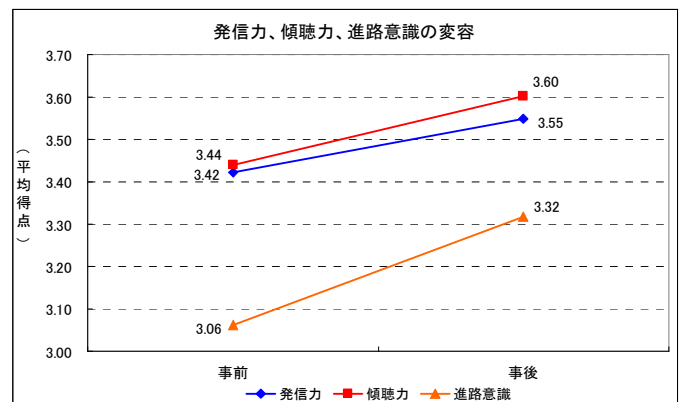


図5 発信力、傾聴力、進路意識の変容

「発信力」と「傾聴力」に対する意識を高めたと考えられる。特に、「発信力」では「自分の意見や話を、相手に分かるようにはっきりと伝えることができる」、「傾聴力」では「相手が話をしているときは、最後まで話を聞き、話に割り込まないようにしている」、「相手が話す内容のポイントを、うまくつかみ取ることができる」という設問において、平均得点の上昇が大きく、意識を高めることができたと考える。

他者とかかわる活動は、他者や自分を知り、客観的に自分を見ることで自信を持たせ、「自己理解」を深めて、進路に対する意識を高めたのではないかと考えられる。特に、「自分にはどのような能力があるか、正しく判断すること」、「自分の才能を生かすことができる、職業や職種を自分で決めること」、「自分の能力や興味に合うと思われる、職業や職種を選ぶこと」、「将来のために、在学中にやっておくべきことの計画を立てること」、「現在考えているいくつかの職業や職種のなかから、一つの職業に絞り込むこと」の項目において、平均得点が有意に上昇している。

(イ) 授業評価票

2年生の授業評価票の結果は、9つの質問項目すべてにおいて肯定的評価と判断できる「はい」、「どちらかといえばはい」の回答が90%以上、1年生においても、80%以上となり、概ね授業のねらいや展開が達成できていたのではないかと考えられる（図6、図7）。

2年生では、すべての生徒が自分の生き方や進路について考えることができ、他者の考えや気持ちを知ることができる内容であったと回答していた。反対に1年生では「活動にどのように取り組めばよいか、分かりやすく伝えられていたか」、「自分の考えや意見を他者に話すことができる内容であったか」という問いに対して、「どちらかといえばいい」、「いい」の回答が15%を超えており、授業展開において活動を分かりやすく伝え、他者に話すことができる内容へと改善する必要があると考えられる。

意欲的に臨むことができなかった生徒や、グループワークの必要性を感じなかった生徒がいることも回答から分かるが、初めにグループワークの必要性やねらいを理解させることが重要であると考えられる。また、他者とかかわりのなかで自己に対する理解を深め、生き方や進路を考えていくことの大切さについて理解させることや、他者とかかわる際に

表1 希望進路別の発信力、傾聴力、進路意識の変容

希望進路	項目	事前	事後	有意差
大学・短大	発信力	3.29	3.43	
	傾聴力	3.57	3.82	
	進路意識	3.02	3.33	**
専門学校	発信力	3.64	3.75	
	傾聴力	3.64	3.80	
	進路意識	3.48	3.56	
就職	発信力	3.40	3.41	
	傾聴力	3.31	3.42	
	進路意識	3.12	3.30	*
未定	発信力	3.36	3.62	*
	傾聴力	3.35	3.55	
	進路意識	2.71	3.15	**

※ t検定において、*は5%水準、**は1%水準で有意差あり

表2 実施クラス別の発信力、傾聴力、進路意識の変容

実施クラス	項目	事前	事後	有意差
2年生	発信力	3.54	3.70	
	傾聴力	3.59	3.79	
	進路意識	3.07	3.50	***
1年生	発信力	3.32	3.43	
	傾聴力	3.32	3.46	
	進路意識	3.05	3.18	**

※ t検定において、**は1%水準、***は0.1%水準で有意差あり

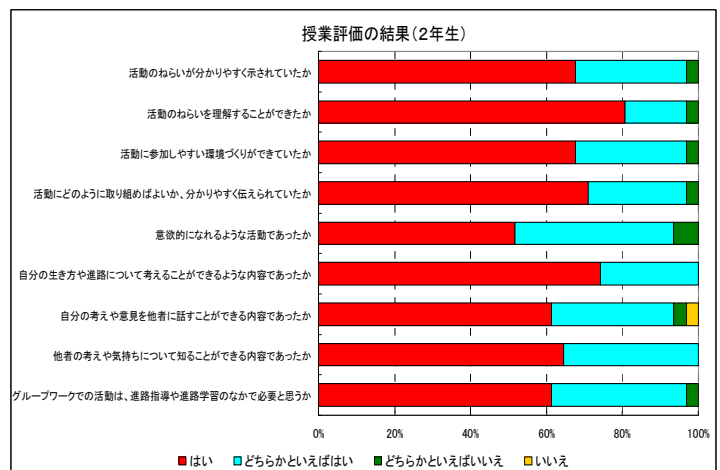


図6 授業評価票の結果(2年生)

「発信力」と「傾聴力」を意識し、コミュニケーション能力を向上させるといふねらいについても、十分に理解を図っていく必要があると考えられる。

授業に対する意見や感想では、2年生の回答者の半数以上から「楽しくできた」という回答が見られ、「傾聴力」と「発信力」の向上をねらいとした、グループワークを用いた進路学習が、意欲的な学習活動となる可能性を感じ取ることができた。一方1年生では「将来のことをしっかり考えていきたいと思った」等の肯定的な意見が多く見られたが、「難しかった」や「説明が分かりづらかった」という否定的な意見もあり、内容や方法について改善していく必要があると考えられる。

参観者からは、「生徒に有意義な授業だったと思う」等の、グループワークを用いた進路学習に対する肯定的な意見が多かった。しかし、「2年生では、考えや意見に返すことができるような、もう一歩高い発信ができればよかった」等の指摘もあり、改善が必要であることも分かった。

(ウ) 振り返りシート

振り返り用紙の自己評価では、2年生はほとんどの生徒がよく取り組んでいたことが分かった(図8、図9)。特に、6限目には全員が「発信力」と「傾聴力」を意識し、積極的に取り組んでいたという自己評価が得られた。また5限目の振り返りでは、「傾聴力」に関して「意識して聴くことが大事だ」等の肯定的な意見が多く見られ、意識を高めることができたと考えられる。また、「発信力」においても「他者に理解してもらえた」等の肯定的な意見が見られ、意識を高めたと考えられる。今回取り組ませた発信の方法は、話し伝えるという初歩的な設定であったが、段階的、発展的な育成を考えていく必要があると考える。そのためには、3年間の目標設定をして計画的に実施することが必要である。更に、6限目の振り返りでは、自分を知り、生き方や進路について考えることできたと思われる意見が多く見られ、「自己理解」を深めさせ、「進路意識」の高揚を図ることができたと考えられる。

1年生は2年生よりも自己評価が低く、積極的に取り組み、「発信力」と「傾聴力」を意識できた生徒は約80%にとどまった(図10)。このよう

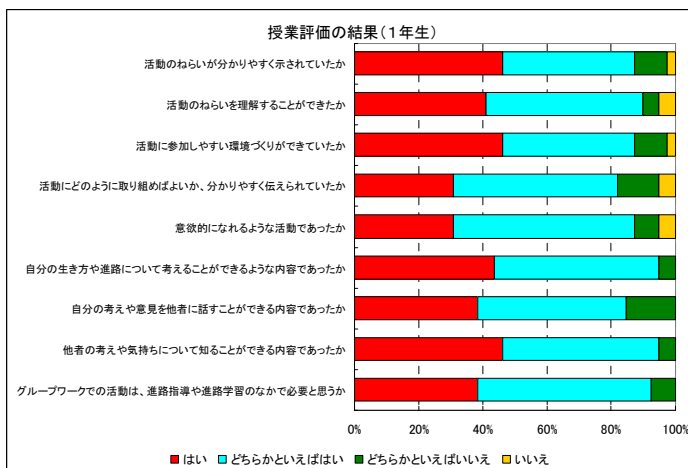


図7 授業評価票の結果(1年生)

「難しかった」や「説明が分かりづらかった」という否定的な意見もあり、内容や方法について改善していく必要があると考えられる。

参観者からは、「生徒に有意義な授業だったと思う」等の、グループワークを用いた進路学習に対する肯定的な意見が多かった。しかし、「2年生では、考えや意見に返すことができるような、もう一歩高い発信ができればよかった」等の指摘もあり、改善が必要であることも分かった。

(ウ) 振り返りシート

振り返り用紙の自己評価では、2年生はほとんどの生徒がよく取り組んでいたことが分かった(図8、図9)。特に、6限目には全員が「発信力」と「傾聴力」を意識し、積極的に取り組んでいたという自己評価が得られた。また5限目の振り返りでは、「傾聴力」に関して「意識して聴くことが大事だ」等の肯定的な意見が多く見られ、意識を高めることができたと考えられる。また、「発信力」においても「他者に理解してもらえた」等の肯定的な意見が見られ、意識を高めたと考えられる。今回取り組ませた発信の方法は、話し伝えるという初歩的な設定であったが、段階的、発展的な育成を考えていく必要があると考える。そのためには、3年間の目標設定をして計画的に実施することが必要である。更に、6限目の振り返りでは、自分を知り、生き方や進路について考えることできたと思われる意見が多く見られ、「自己理解」を深めさせ、「進路意識」の高揚を図ることができたと考えられる。

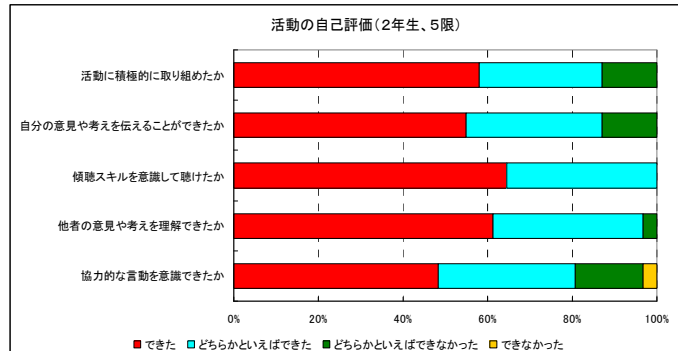


図8 活動の自己評価(2年生、5限)

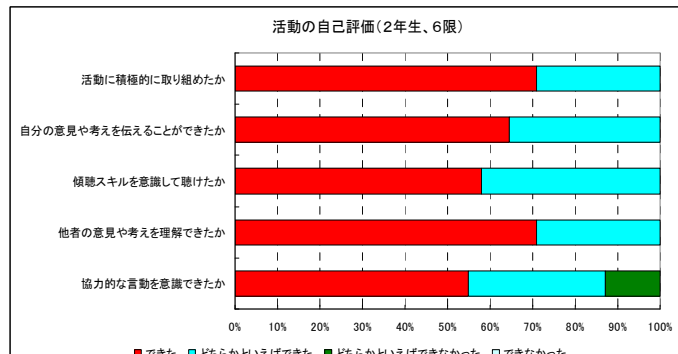


図9 活動の自己評価(2年生、6限)

な結果となった原因の一つとして、2年生の5限目で取り組んだような、話し方と聴き方について学び、意識させる活動の有無が考えられる。1年生は話し方と聴き方に対する意識付けの活動が実施できなかったため、「発信力」と「傾聴力」に対する意識が低くなったのではないかと考えられる。しかしながら、生徒の意見では、自分の将来に向けて、目の前のことからがんばらなければいけないという気付きが多く見られ、今後の自分の生き方に対する意識付けや動機付けをさらに支援していくことが必要であると考えられる。

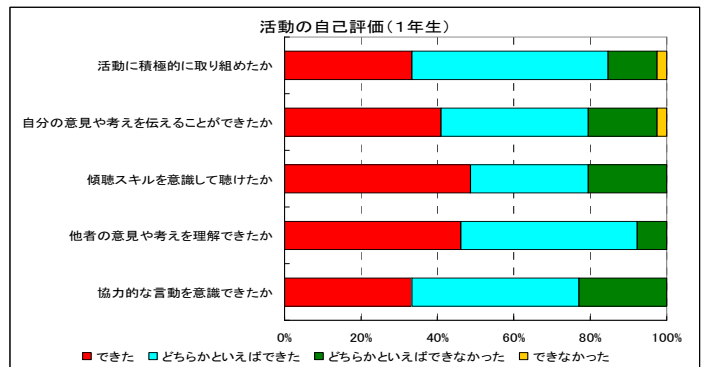


図10 活動の自己評価(1年生)

5 成果と課題

今回の研究を通して、次のような成果があった。アンケート調査の結果から、自分の能力を判断することや職業への適性を把握して職業を選択すること、将来に向けた計画を立てることなどに対する自信を高め、「自己理解」を深めて、「進路意識」の高揚を図ることができたと考えられる。また、グループワークを用いた進路学習に取り組んだ時間がわずかであったにもかかわらず、自分の意見や話を、相手に分かるように伝えることや、話の途中で割り込まず最後まで話を聴くこと、話の内容のポイントをつかむこと等に対する意識を高め、コミュニケーション能力の要素である、「発信力」と「傾聴力」において、伸長を図ることができたと考えられる。したがって、学校と社会をつなぐための支援方法の一つとして、グループワークを用いた進路学習に取り組んでいくことは有効であると考えられる。

しかし、今回のグループワークを用いた進路学習では、「進路意識」を高め、コミュニケーション能力を伸長させる効果は見られたが、あくまでも進路学習の一部を実施したにすぎない。

社会で求められる人材を育成するためには、「発信力」と「傾聴力」をさらに高め、コミュニケーション能力の伸長を図る必要がある。また、コミュニケーション能力は大変幅広い意味を持っていることから、例えば「合意形成能力」や「論理的自己表現力」等の能力も併せて向上させることで、コミュニケーション能力をより伸長させることができると考えられる。

そのためには、教科、学年を超えて横断的に連携することが必要であると考えられる。今回の研究では、進路学習のなかでグループワークを用いて取り組ませたが、進路学習以外のさまざまな学校教育活動に取り入れて活用することで、コミュニケーション能力を伸長させるために支援する場面が増えると期待される。教科や学年、教員の間で連携を図り、共通意識のもとで取り組んでいくことが重要であると考えられる。

また、高知県内公立高等学校の各校の学校要覧で示されている各学年の進路目標は、多くの学校で1年生が「自己理解」、2年生が「自己理解の深化」や「自己発展」、3年生が「自己実現」となっており、これらに沿った内容の進路学習を計画するとともに、「発信力」と「傾聴力」をより高める方法について検討する必要があると考えられることから、3年間を通して発達段階に応じた計画をする必要があると考える。

今後は、グループワークを用いた進路学習について、学年ごとの実施時期や時間数、実施内容について計画し、子どもたちの在り方・生き方を支援する方法の一つとなるよう取り組んでいきたい。

(主な引用・参考文献)

- 1) 吉田隆江「エンカウンターで学級が変わる 高等学校編」 図書文化社 1999

- 2) 「新規高校卒業予定者の採用に関するアンケート調査集計結果」 東京経営者協会 2008
- 3) 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議 2004
- 4) 「高校生採用に関する企業意識調査報告書」 高知県経営者協会 2009
- 5) 「若者の未来のキャリアを育むために～若年者キャリア支援政策の展開～」 厚生労働省 2003
- 6) 佐野明「農業教育資料58」 実教出版 2006
- 7) 「キャリア教育推進の手引―児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために―」 文部科学省 2006
- 8) 「キャリア教育資料集」 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2007
- 9) 「YESプログラム」 厚生労働省 2005
- 10) 「社会人基礎力に関する研究会―中間取りまとめ―」 経済産業省 2006
- 11) 「構成的グループエンカウンター事典」 図書文化社 2004
- 12) 「エンカウンターで進路指導が変わる―生き抜くためのあり方生き方教育―」 図書文化社 2001
- 13) 「ガイダンス&カウンセリングテキスト」 RECRUIT 2004
- 14) 「将来設計テキスト」 RECRUIT 2005
- 15) 「コミュニケーションテキスト」 RECRUIT 2005
- 16) 「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校」 図書文化 1999
- 17) 鶴田美里映 有倉巳幸「高校生における批判的思考態度と自己表現の関連性の検討」 『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』 2007
- 18) 浦上昌則「学生の進路選択に対する自己効力に関する研究」 『名古屋大学教育学部紀要』 1995
- 19) 「経済産業省のキャリア教育・職業教育への取組」 経済産業省 2006
- 20) 山崎保寿「キャリア教育が高校を変える」 学事出版 2006